363
1924

363-192

帝國圖書館藏

荀

秦宋元著

大正
7. 11. 19
内交

緒言

鄙に都に
茅屋に高樓に
尠くとも一棹の簞笥を備へざるはなかるべし
而して簞笥は桐の簞笥を貴しとす
蓋し桐は水火に堪へ輕便にして彈力あるが故ならん
富者は綺羅を充して憂ひ
貧者は滿す能はずして悲む
如かず天の與へたる心の錦を藏せんにはと

旅行により讀書により
得たる所を整へて
理めたるこの一本
軈て桐の簞笥ほどに用ひんとて

大正六年春　著者

見ん人の爲にはあらで奥山に
おのが誠を咲く櫻かな

母の

（子拍四調短ト）

♩=108

(一) ヨ ー ニ モ イ ミ ジ ク ダ

(二) ハ ー ナ ニ ナ ク ト リ ミ

フ シ オ モ シ ロ キ ー カ

カ ハ ツ ノ ウ タ モ ー ム

カ ナ ヅ ル ヒ ト モ ー キ

ナ ー ミ ノ シ ラ ベ モ ー

シ バ シ ハ ワ レ ラ ー

オ ノ ツ カ ラ ナ ル ー

Every noble work is at first impossible.

CARLYLE

Impossible is the adjective of fools.

NAPOLEON

The king is the man who can.

CARLYLE

Victory belongs to the most persevering.

NAPOLEON

母の聲

一　世にもいみじく妙なるは、
　ふしおもしろき樂の音か。
かなづる人も、聽くひとも、
　しばしは我を忘るなり。

二　花に啼く鳥、水に棲む
　蛙のうたも、蟲の韻も、
波のしらべも、松かぜも、
　おのづからなる樂なれや。

三　さもあらばあれ、嬉しきは、
　母がなさけのいつくしみ。

旅寐の夢も、いくたびか、
　ふる郷遠くかよひけむ。

四　今日はるゝと歸り來て、
　老いたる母のなつかしき、
笑顔にもるゝ歡びの、
　みこゑ聞くこそ嬉しけれ。

五　母のみ聲にくらぶれば、
　かの樂の音も何ならむ。
世にもいみじく妙なるは、
　母のみ聲と今ぞ知る。

岡本米藏原作
桑田春風作歌
田村虎藏作曲

母の聲

（ト短調四拍子）

♩=108

（一）ヨ　ー　ニ　モ　イ　ミ　ジ　ク　タ　ヘ　ナ　ル　ハ
（二）ハ　ー　ナ　ニ　ナ　ク　ト　リ　ミ　ジ　ニ　ス　ム

フ　シ　オ　モ　シ　ロ　キ　ー　ガ　ク　ノ　ネ　カ
カ　ハ　ヅ　ノ　ウ　タ　モ　ー　ム　シ　ノ　ネ　モ

カ　ナ　ヅ　ル　ヒ　ト　モ　ー　キ　ク　ヒ　ト　モ
ナ　ー　ミ　ノ　シ　ラ　ベ　モ　マ　ツ　カ　セ　モ

シ　バ　シ　ハ　ワ　レ　チ　ー　ワ　ス　ル　ナ　リ
オ　ノ　ヅ　カ　ラ　ナ　ル　ー　ゲ　ク　ナ　レ　ヤ

裝畫は　竹内栖鳳先生
挿畫は　竹内栖鳳先生
作歌は　桑田春風先生
作曲は　田村虎藏先生

茲に謹んで感謝す

著者

目次

「牛」の生立……一
隕鐵の光……七
父の情……一三
母の聲……二二
雙親の任務……二九
牡蠣と眞珠……三七
猿の說……四三
囚人中の囚人……四七

人物と磁石……五三
振動（ヴァイブレイション）……五九
畫夢（ヴィジョン）……六五
余は汽車に乘ることを好む……七一
古意新聲……七七
心の出張所……八三
紙幣と言語……八九
餘韻の力……九七
因果應報……一〇一
時計の見方……一〇七

時間外の時間……一一五
夜の要……一二一
商業學と心理學……一二七
資本と資本金……一三三
樂屋より見たるウオール スヅリイト……一三九
犬と雕（くまたか）……一五一
生存競爭……一五七
誓文拂と見切品……一六一
或物と何物……一六五
紹介と照會……一七一

借金と保證……一七七
金錢の使途……一八三
經濟學者の非經濟家……一八九
商社と蜂巣……一九三
桐の葉……一九九
陰を背にせよ……二〇三
微笑め微笑め……二〇九
嗤はるゝとも嗤はるゝ勿れ……二一五
山縣公を椿山莊に訪ひて……二二一
老いたる青年……二二一

試驗の意義……二三九
庭園と公園……二四五
碁盤と地球……二五一
天文學と四疊半……二五五
外國旅券と海外雄飛……二六一
米國と日本……二六七
言葉の風味……二七三
新聞雜誌の讀方……二八三
海外へ赴く者への贐十二點……二八九
自己對社會の貸借對照表……二九五

「牛」の生立

目次

富士山と琵琶湖……一〇一

神祕と山彦……一〇七

むかしたれかゝる櫻の花を植ゑて
吉野を春の山となしけん

著者、山奥の農家に生れ、爰に三十有五年、其の間、何れの時、何れの所、會ふ人毎に、觸るゝ物毎に、一として負はざるはなく、一として感謝の種ならざるはなかりき

帝國圖書館藏

仲へても如何で忘れんくみて見し
野中の水の深き心を

蓋し、反覆反誦、常に新なる味を嘗め得るものは、

己が過去の過失より得たる教訓乎、車中船中の少閑を偸みて、其の一二を筆にしたるもの、即ち是れ「牛」なり

大正四年元旦、緒言を書き、月餘にして稿を納め、之が上梓を博文館に命ず、印刷將に就らんとせし五月十七日、偶〻小石川の同工場、祝融の災に罹り、將に他の刊行物と共に、烏有に歸すべかりしを、辛うじて免れ、六月一日、漸く世に出づ

佛典に「牛は水を飲みて乳となし、蛇は水を飲みて毒となす」と、道風は飛び着くを見て學び、芭蕉は飛び込むを見て悟る、菜根譚に、「鳥語蟲聲、總是傳心之訣、花英草色、無非見道之文」と、而して尊德は

音もなく香もなく常に天地は
書かざる經をくりかへしつゝ

と、常に念へば、宇宙の一事一物、人に幸せざるものあらんや

念ふことを練習する、恐らくは、讀書と旅行とに如くものあらじ、而して知識の基礎の、若し入口にあるに非ずして、出口にあるものなりとせば、著作も亦敢て不可なりとせんや

「牛」の生立

文は情より生じ、情は文より生ず、さはあれ、若し牛の、馬の嗤ふに任せて千里を歩む時、著者、果して能く之に曳かれ得るや否や、基督の訓に

生の門は窄く、其の路は細く、之に入る者は尠し

と

隕鐵の光

韓愈の雜說に、世に伯樂ありて、然る後千里の馬あり、千里の馬は常にあれども、伯樂常にあらざるが故に、可惜名馬も、奴隸の手に辱しめられ、槽櫪の間に駢死すとて、羣の人材はあれども、之を用ふる宰相なきを諷刺す

偉人と呼ばれ、先覺と稱せらるゝ者、眼識透徹克く時勢を達觀し、思想高邁遠く凡人を超越し、遙かに其の眼界の外に在り、耶蘇、釋迦、コロンブス、ルーテル、日蓮、親鸞、象山、松陰、孰れも然らざるはなし、

是れ偉人に非ずんば偉人を知る能はざる所以ならん

交は明治廿三年四月、富山縣上市川の上流、小林一生所有鑛山の礫中より、坑夫の一人、一個の鑛塊を得たり、重さ六貫六百目、當時大阪造幣局の鑑定を乞ひしに、只一鐵塊而已とて、一瞥だに與へられず、爾來澤庵漬の押石となること五年、明治廿八年二月、農商務省技師近藤會次郎によりて、其の隕鐵たることを證明せらる

明治廿八年三月十八日、榎本武揚の所有に歸し、三十一年二月、其の中一貫餘を割きて、大小二振を作り、流星刀と命名し、一振を當時の皇太子殿下に献上す、一は十六回、他は廿四回、折返し折返し鍛錬せしに、果然、刀身の表面に、恰も槻の如輪木理に似たる斑紋あらはれ出づ、卽ち是れ隕鐵の特質にして、工人岡吉宗、鎭守の氷川神社に祈誓し、精進潔齋三週間、漸く其の目的を達したるものなりと

一塊の鐵、鑛坑を出でて五年、辛うじて明鑑に會ひ、更に三年、漸く名工の鍛錬を經て、始めて眞價を發揮し、無上の光榮に浴す、一個の談片、尙掬すべき情味の溢るゝものあるを見ずや

父の情

子を思ふ道にまどひて今ぞしる
ちゝぶの山のふかき惠は　藍庭

母は泣きて泣けども、父は泣かずして泣く、母の愛、父の情、二者全く異なりて而して異ならず、母は子に、滾々盡きざる谷川の清水の如く、純潔Pureならんことを希ひ、父は子に、泰然怒濤の中に立つ磐石の如く、剛毅Fearlessならんことを望まんも、等しく是れ子の行末を念ふ、親の情に外ならじ

母は内に在れども、父は外に在り、間々死生の間

をも來往し、世の毀譽褒貶を外に、櫛風沐雨、凡ゆる艱苦と闘ひつゝ、黽勉努力、ベストを盡して業に服し、産を治め、世務を開き、己れを忘れて、子の成人を樂しむ

正義の人を見ては、子の正義ならんことを念ひ、能ある人を聞きては、子の能あらんことを願ひ、忠臣の史蹟を讀みては、只管子の忠臣たらんことを是れ祈る、或は嚴に過ぐるが如く見ゆることあらんも、こは唯子を思ふ至情の發露に過ぎじ、されば父としての無上の喜は、子の譽めらるゝことなるべく、其の苦は、

子の責めらるゝことならん

蘇東坡は

人家養子望聰明、我被聰明誤一生
唯願孩兒愚且魯、無災無難到公卿

と、若し夫れ、世に己が業を、己が子に繼がしむることを欲せざる父あらんか、そは必ずや己が過去の苦き經驗を、己が子をして再びせしむるに忍びざるが故ならん、世路に戰うて猛虎をも拉がん父の、何すれそ子を思ふの情に脆き、土御門内大臣通親の歌に

位山あとをたづねてのぼれども

子を思ふ道になほまどひぬる

世の父にして、如何に劇務の忙殺するありとも、
恒に子の可憐の姿を、己が心裡に描かざるものあらんや

あすよりは何をたのみにながめまし
嵐に枯れしなでしこの花

とは、蓋し子に先だたれし父の嘆乎、林永善の歌にも

思ひきや殘るかひなき老づるの
こを先だてゝ哭になかんとは

と、試みに、雲井龍雄の詩を誦せよ

斯身飢斯兒不育
捨是耶不捨非耶
哀愛不禁無情涙
兒兮無命伴黄泉
焦心頻屬良家救
橋畔忽驚行人語

と、見るべし父の情、實に

弱くして強きものは母にして
強くして弱きものは父ぞかし

斯兒不棄斯身飢
人間恩愛斯心迷
復弄兒顔多苦思
兒兮有命斯心知
欲去不忍別離悲
殘月一聲杜鵑啼

母の聲

試みに、音色の幽艷暢明なるヴァキオリン、幽鬱のヴォオラ、莊重なるセロ、バス、清澄明快のフリュート、憂鬱なるオーボエ、柔婉溫雅のクラリネット、勇壯活潑なるトランペット、コーネット、壯大豪宕のトロンボン、優美にして可憐なるホルン、テューバ、鼓々鏘々、或は戛々として響くティンパニイ、タンボリン、シンバル、カスタネット、トライアングル、カロリン、ゴング、ベルなどによりて演ぜらるゝオーケストラを聽け、樂長のとるタクトにつれて、或は緩く、

或は速く、一高一低、強又弱、倏ちにして猛獸の吼ゆるが如く、忽ちにして處女の囁くが如く、雄大微妙、譬ふるにものなし

中秋の涼夜、皎々たる月下、籬を隔てゝ琴の音を聞かんか、宛然、玉を轉すが如き美音、恍として世を忘れしめん

音樂は、感情の表現にして、奏づる人の感情は、聽者の耳朶をうちて、同感の情を催さしむ、蓋し是れ人情の自然乎、されば古人も「樂行はれて志清く、禮修つて行成る、耳目聰明、血氣和平、風を移し、俗を易へ、天下皆安んずるは樂より善きは莫し」と、樂の効益、千古渝らざるを見ずや

樹間に囀づる小禽、そらふく松風、草叢にすだく蟲、麓に囁く小川、何すれそ夫れ、自然の音樂の妙なる、而して更に妙なるは、母子の愛情乎、母子相離ることと遠くまた永からんか、其の愛情やまた益〻深く益〻濃かなるものあらん

"When society has turned its back on the outcast, when the prison door closes behind him, when companions have fled, when sympathy and mercy have departed, when the world

has forgotten, the mother remembers and loves her child."

著者、常に萬里の異域に在り、而して必ず一歳一次、母を省みるを例とす、其の鄉里に赴かんとするや、彷彿として心裡に描かるゝものは、正に老いたる母の溫容なり

今年、父の還曆を祝はんとて歸省す、母は待つに自ら沸かしたる風呂と、自ら作りたる料理とを以てす、蓋し是れ、母の無上の樂みとする所

惠の湯に浴して、體も胖かに、氣も凋しき時、不圖も厨房の彼方に、嘻々として母の笑ふを聞く、其の

瞬間、純潔無垢、天眞爛漫たる母の聲は、端なくも著者の情緒の琴線に觸れ、如何に著者を動かせしことよ

余は音樂を好み、音樂を娛む、而かも未だ嘗て、餘韻嫋々、爾來耳底を去らざる、かの母の聲ほど、余が心を喜ばしめたる音樂を聞かず

嗚呼、オーケストラや雄大微妙なり、鳥聲蟲語や宛轉嚶喨なり、然れども知らず、慈母の歡聲の更に其の幾倍なるかを

雙親の任務

山上憶良の歌に

白かねも黄金も玉もなにせむに
まされる寶子にしかめやも

嗚呼是れ親の眞情乎、　賴山陽の自題に

此膝不レ屈二於諸侯一　聊答二故君之德一　此眼竭二之於
群籍一　不レ虛二先人之囑一　此脚侍二母輿一　二躋二芳山一
三棹二大湖一　四上二下溪灣一　而未曾踵二朱頓之門一

と、子の至情、躍如として見るべし、己れを忘れて子を思ふ親、己れを忘れて親に仕ふる子、宜なる哉「愛

は最強の力」と

子を育つるに、陷り易きは、蓋し姑息の愛に過ぐるの弊乎、習慣はやがて天性とも云ひ、病、膏肓に入りては治し難しとも云ふ、知らずや恐るべき習慣も、其の原因は家庭に於ける、些々たる親の不注意の結果なるを

覺めては乳、泣きては乳、漸く長じては菓子と、時を選ばず漫りに之を與へ、即がて、飲食に對する不羈放縱の習慣を作らしめ、健康を害し、節制を紊るに至らしむ、斯の如きは果して親の本意なりや

俚諺に「眠る兒は息災」「睡眠は最良の保姆」と、而して子供は主として睡眠中に發育し、睡眠中に與へらるゝ親の暗示によりて、感化せらるゝこと、恰かも胎教の胎兒に於けるが如しと云ふ

されば就眠前の忿怒、恐怖の避くべきは固より、寢具に心し、喧噪を避け、高尚にして雄大なる暗示を與へん乎、其の効果や蓋し尠からざらん

一家團欒、寛嚴中を得、賞罰宜を失はず、躬行以て子を率ゆべし、語に

己れの環周は己れなり

と、人の子の、生を此の世に享く、必ずや人としての天職あらん、隨て子は親の私すべき物にあらざるべし、世に、子は親の子なりとて、官吏たれ、軍人たれ、學者たれ、將た何たれと、望むまゝ子に强ふるものなきにしも非ず、痛ましき限りにこそ

子の天性より、子の天職を盡さしめんか、子も亦、やがて己れの天性を發揮し、己が天職に勤しみ、己れを利し、世を益すること大なるべし

明治天皇の御製に

たらちねの庭のをしへはせばけれど

廣き世にたつもとゐとはなれ

牡蠣と眞珠

牡蠣は內に眞珠を抱きて、自ら覺らざるもの〻如し、而して人が萬物の靈長たる所以は、必ずや眞珠以上の眞珠の、自己の裡に在るが故なるべし、人、果して能く、この眞珠を知れりや

牡蠣、眞珠を知らざらんも、眞珠が人をして、其の特質を發揮せしめ、人をして之を愛用せしむるを妨げず、唯人にありては然らず、何となれば人の有する眞珠は、人自ら之を發見し、人自ら之を切瑳せざるべからざればなり、諺にも、汝を救ふものは汝なりと

人が、内に眞珠を發見し、切瑳して光澤を放たしむるは、各自の義務にして、また天の與へたる特權なり、特權の寶庫の鍵は、特權の寶庫を與ふると同時に、必らず天が人に與へたるものぞ

寶庫の扉を開くの勞を厭ひ、自己の眞珠を切瑳するの力を惜むものあらんか、そは人間たるを忌み、牡蠣たらんと希へるものにして、天與の特權を自ら放棄するものぞ

孟子歎じて

人有雞犬放、知求之、　有放心而不知求、

と

"We are living in the midst of a stream of inexhaustible supply. It is one's own fault if he does not take from this stream whatever he needs."

猿の說

齋藤竹堂の猿說に

猿之演劇也、衣冠焉、而爲士大夫、裙帶焉、而爲婦女、且立且坐、且周旋且進退、擧古忠臣烈婦之情狀、一一依倣、視之儼然人也、而或擲一菓于其前、則翻然自失、故態頓發、側衣冠、曳裙帶、匍匐往食之、雖觀者嗤笑弗自知也、嗚呼、猿自飾而爲人、見菓而爲猿、唯一菓而人猿判焉、然今學君子干聲音笑貌、而其節變干斗升之利者、是亦斗升而君子小人判焉、與猿何異

と、不絶物慾而已に耳を掠めらるゝ人、之に目を奪はるゝ人、而して仕事を報酬の問題なりと思意し、何事を營むにも、贈賄收賄を以て事とする人、須らく昧うて可ならん

囚人中の囚人

咆哮一度、百獣をして震駭せしむる獅子も、片足を棘に刺されては、奴隷アンドロクラスに、哀を求め、獅子をば凌ぐ巨象も、一脚を縛られては、もろくも檻内に諸藝を演ず

籠中の小禽、思を漠々たる天空にかよはせ、哀々籠中に鳴く

見よ囹圄の人を、自由全く束縛せられ、人生の温味なき、暗き冷き獄舎の裡に泣く人を、彼等は彼等が造る物に至るまで、監獄特有の缺陥を伴ふと云はるゝ

に非ずや、呑舟の魚も水を放れては、螻蟻に制せらるる

世に、富豪と稱へられ、上下尊信の的となる者にして、自己の財産に、一指をさへ觸るゝこと能はざるものあり、戸主にして戸主たらず、會長にして會長たらず、社長にして社長たらず、首鼠兩端、周圍の鼻息を是れ窺ふ者、亦甚だ尠しとせず、これ等の人々は、蓋しかの猛獸、小禽と共に、其の境遇や、獄中の囚人と五十歩百歩而已

而して茲に云はんと欲する所の囚人は、叙上特殊の囚人に非ず、到る所に見る無數の囚人、即ち臆病てふ自作の繩もて己れを束縛し、而して悟らざる者を指す、其の境遇の憐むべき、世の所謂囚人の比に非ざるべし、古諺に

雖レ有二嘉肴一、弗レ食不レ知二其旨一也
雖レ有二至道一、弗レ學不レ知二其善一也

と、趦趄逡巡、一歩をも踏み出し得ず、可惜有爲の心身を、狹隘なる胸中に幽閉し去る、如斯は、正に囚人以上の囚人にして、即ち囚人中の囚人ともいふべき乎

人物と磁石

單に方角を知らんが爲に用ふる小磁石も、強き電力を得んが爲に用ふるダイナモの大磁石も、共に鐵、ニッケル、コバルトを吸引す、其の力を磁力と云ひ、磁力の及ぶ範圍を磁場と稱す、故に磁力强ければ磁場隨つて廣し

磁石の鐵を吸引するは、鐵が磁場に入り、やがて磁石に感應して、己れも亦磁石となり、異極相引の理によりて、互に之を吸引するものなり

磁石の内最も大なりと云はるゝものを地球磁石と

す、地球上到る處其の磁場ならざるはなく、地球上大小無數の磁石、一として其の指揮を受けざるはなし、是れ卽がて、凡べての磁石が一定の方向を指示する所以ならん

人物は猶磁石の如きもの乎、而して其の感化力は之を磁力に比すべきもの乎、感化の一村に及ぶものあり、一郡に及ぶものあり、一縣に及ぶものあり、而して偶〻一國若くは全世界に及ぶものあり、世之を稱して偉人と云ふ、偉人は社會の造物者なり、と云へるは蓋し世おしなべて、其の高風に感化せらるゝが故ならん

古來、君子を以て梅に譬ふ、梅は其の居る處の俗には移されずして、却てその俗を易ふと言へり

古歌に

梅の花香を道のしるべにて
主人もしらぬ宿に來にけり

人物能く風を作り、人物能く人を引く、地方、官廳、商社或は學校が、內に人物無くして、外に人物を求めんと欲するが如きことあらんか、是れ正に磁力なき磁石の、鐵を吸引せんとするの類にはあらざる乎

佛語に

自證若滿　必有化他

と

振動 Vibration

山寺の晩鐘、暮靄を破つて響く時、其の餘音の、山を超え谷を越え、高く低く、唸りを作して、遠く近く傳はり播がる、宛かも湛々たる水面に、一個の石を投じて波瀾を起すとき、凸凹交々、波紋の漸進するが如し

音は一種の振動にして、發音體の振動が空氣に傳はり、音波を作りて、吾人の耳底に達するものなることは、物理學の教ふる所、而して音の最も大なるものは、蓋し雷鳴乎、雷鳴一たび轟然として響かんか、山

川湖海も爲に震撼鳴動す、その壯烈さ、何にか譬へんする時、天下擧げて之に感動し共鳴する狀や如何、蓋し偉人の一聲亦大なる振動乎

偉人の、時勢に憤慨し、猛然蹶起して、大聲呼號

一波起ちて萬波隨つて起る、人事亦振動ならざるはなからん、試みに大小二個の振動體を接近せしめよ、暫時にして、小なるものは自己固有の振動を罷め、軈て大なるものの振動のまにまに振動する、恰も群小の喧囂が、大人の一喝に逢ひて忽ち停止するが如けん

而して振動の强弱は力の大小に比例し、人事の振

動は自信力の大小に比例するもの乎、蓋し大なる自信の行く所、天下風靡せざるものなからん、於是乎、余は敢て信ぜんとす

大事業は大自信の發現にして

大自信は大事業を成就すべし

と

振動

晝夢

天は人をして、意の儘に思ひ、思ふ儘に行はしむ、されば盧生が如く、黄粱一炊の間に、富貴の五十年を夢んことも亦敢て差支なかるべし、ただ世に空中樓閣を畫きて嘆はるゝものあるは、之を眞の樓閣たらしむることに努力せざるが故ならん

井をほりて今一尺で出る水を
掘らずに出ずといふ人ぞうき

太閤秀吉、足輕の頃より、夜間などの公暇に、業に大陸征伐に關する考案、策略など、忙しく書き溜め

居たりしとか

ワシントンは十二歳の時、友人に、成長の後は世界一の美人と結婚し、一流の富豪となり、陸軍を指揮し、國民を統治せん、と書きて送りしとか

見るべし、英雄豪傑、大事業家、孰れもが先づ己の理想を心裡に描き、其の爽快なる畫夢に勵まされ、不斷之を實現せんとして奮鬪せる其の跡を

ベルの電話機、マーコニィの無線電信、エディソンの蓄音機、ライトの飛行機も、亦是れ畫夢に原因せざるはなし

世の青年、描け心中に、自己の將來を、夢みよ金錢財寶の外に、更に嵩高にして且つ壯大なる或物を、而して必ず努力せよ、努力して實現せよ、己が見たる夢を

余は汽車に乗ることを好む

余は汽車に乘ることを好む
然り余は汽車に乘ることを好む
余は往くことを好む故に
然り余は往くことを好む故に
而して汽車は往く
一村雨の雨やどり
未だ知らざる乘合と
語らずとも目と目は語る
而して汽車は往く
鄙かと思へば都

都かと思へば鄙
野に立つ男
街行く女
而して汽車は往く
山かと思へば河
谷かと思へば畑
交〻余に向つて走る
而して汽車は往く
降る雨、晴る〻空
變る木の樣、草の色

翔つ鳥、眠る蝶
而して汽車は往く
忽ちにして嘻々として戯る稚兒の群
倏ちにして默々として息む石碑の森
坐ながらにして觀ずる世の中
而して汽車は往く
書册を手に
古聖と語り
芝蘭の香りに汽車を忘る

余は汽車に乘ることを好む

忘るとも汽車は往く
行く間々にきづく空中樓閣
而して汽車は往く
余は汽車に乘ることを好む
然り余は汽車に乘ることを好む

古意新聲

モンテスキユウ、嘗て人に語りて

卿の數時間にして讀破し得る此の書も、之を作るの勞は、遂に余の髮をしてかくも白からしめたり

と、著書に對する苦心や見るべし、靜かに先哲の貽せし書を繙かんか、紙背に潛める雄渾の思想、油然として起り、その偉大なる見識、その赤誠、不尠讀者をして感動せしめん、蓋し是れ著者の思想に永久の生命ある所以ならん乎

語に「過去に在りし事、現在に存し、重ねて未來に現はれん、日月の下、新事なし」と、ショウペンハウエルは「賢者は常に同じ事を敎へ、愚人は常に同じ過を爲す」と、眞理も亦物質の如く不生不滅のもの乎

語簡にして、意深きものは、蓋し格言金言乎、世の先覺者が、常に新しき方法を以て之を解き、能く流俗の意表に出で、以て世を覺醒するは、正に古意に新聲を發せしめたるもの、其の効や、或は物理化學の發明の夫れにも讓らざらん

平凡なる事を非凡に遂行するものを偉人といふとか、平凡なる眞理も、運用の妙全く一心に存せん、希くば世の識者よ、物質上の發明と同時に埋れたる思想の發見にも意を注がんことを

"Though old the thought, and oft expressed,
'Tis his at last who says it best."

心の出張所

見るごとに皆そのまゝの姿かな

柳は緑　花は紅

點火したる提灯と、點火せざる提灯との、一見直に識別せらるゝはそも何故ぞ、試みに肉體を提灯とせば、良心は正に蠟燭乎、著者、さきに「牛」の中に、「顏は品性の掲示場なり」と云へり、而して今爰に百尺竿頭更に一歩を進め、眼は心の出張所なりと云はんと欲す

怒りて裂け、泣きて脹れ、驚きて圓く、優しくし

て細く、嬉しくして涙、見るべし種々の眼が、如何に正直に、如何に的確に、樣々の心を露すかを

アレキサンダー大王、波斯征討の陣中、大患に罹る、頃しも波斯王ダリオス三世大軍を督して、將に進軍の途上にありければ、全軍驚怖し、大王の恢復の一日も早からんことを祈るや切なり、侍醫フィリップ亦王の病革るを見て、甚しく心痛し、一入調劑に心を碎けり、時に大王は其の信任するパルメニオ將軍より、一書を得たり、曰く「大王フィリップを信じ給ふ勿れ彼は彼斯王に心を寄せんずる疑あり、まゐらせんとする藥こそ危險のきはみなれ」と、大王讀み了りて之を枕の下にし、フィリップの藥を捧げて入り來るや、藥の盃を右手にし、左手にてさきの上書を取り出し、フィリップをして之を讀ましめつゝ、暫時彼が眼の色を守りしが、やがて一氣に其の藥を嚥干したり、烱眼の大王は、かくて三日の後、再び馬上の人となりしと

福翁、「學問のすゝめ」の中に「人の顏色は猶邸宅に於ける門戸の如し」と云へり、西諺にも

Their appearance is the reflex of their thoughts.

と、世の、人の心の色を知らんと欲する人、先づ其の

眼の色に意を注ぎては奈何

紙幣と言語

讀書不見聖賢、爲鉛槧傭
居官不愛子民、爲衣冠盜
講學不尚躬行、爲口頭禪
立業不思種德、爲眼前花

菜根譚

荀子に、「君子の學は耳より入りて心に著き、小人の學は耳より入りて口より出づ、耳口間四寸のみ、曷ぞ以て七尺の軀を美しくするに足らん」と、誠に理ならずや

紙幣の普く國内に流通する所以や如何、其の紙質

の堅緻なる爲か、其の意匠の精巧なる爲か、將た其の印刷の鮮麗なる爲か、掌大の紙片の克く百圓の價値を保つ、蓋し其の表面に「此券引換に金貨百圓相渡可申候」と約束し、世人一般、其の確實なることを信ずるが故ならずや、若し此の約束にして履行せられざらんか、その價値や果して奈何

世に、紙幣よりも更に多く用ひらるゝものは言語乎、而して言語に價値ある所以や如何、其の用語の優婉なるが故か、修辭の巧妙なるが故か、非じ、唯其の裏面に躬行あるが故ならん、若し言語の裏面に躬行な

からんか、其の言語や卽ち不換言語たらん而已

不換紙幣を忌み嫌ふ世に、不換言語の尙通用するは何故ぞや

昔者、延陵の季子、劒を徐の君の墓側に懸けて「前に心の中にて贈らんと思ひたれば、君今死したりとて、などか素志を變ふべきや」と曰へり

古歌に

心とて人に見すべき色ぞなき
ただ行とことの葉に見ゆ

リンコーンの言に

You may deceive all the people some of the time, some of the people all the time, but not all the people all the time. We cannot deceive ourselves, however, any of the time, and the only way to enjoy our own respect is to deserve it.

と、己が使命を果し得ざりし時、果し得ざりしことを、一言にて復命せば足るものを、殊更に己が責を轉嫁せんと欲して、滔々其の成行に千萬言を陳べ、辭を左右にし、工夫を凝らし、擧句に「殆んど成功したり」とか、「若しも斯々せざりしならば」など云ふ、蓋し是れ失敗者の常套語乎、If (若しも) と Almost (殆んど)

とは果して斯かる場合に於て、使用すべき語なりや

如斯復命を敢てなす者は、嘘て己が無能を發表する而已ならず、更に己が卑怯をも兼ねて告白するものにして、苦心慘憺、自己の短所を蔽はんとして、一の過を更に二となす所、口を開きて臟腑を露す蛙と見苦しさ何れぞ

餘韻の力

因果應報

華嚴經に

一卽一切　因果歷然

と、善惡の因、慶殃の果、應報の違はざること、影の形に隨ふが如く、原因と結果とは一體にして二體に非らじ、唯之を前後より見たるに止らん、道歌に

をこたりも夏のかせぎもほどほどに
穗にあらはれて見ゆる秋の田

と、白隱禪師の歌に

此の世は前世の種次第、未來は此の世の種次第、

富貴に大小あることは、蒔く種大小ある故ぞ、
此の世は僅のものなれば、よい種擇んで蒔たまへ、
種を惜みてうゑざれば、穀物取りたるためしなし、
田畑に麥稗蒔かずして、麥稗取りたるためしなし
と、陰德陽報、石を投ぜんか石來り、餅を擲げんか餅
回らん、人生の行路は卽がて原因結果の連鎖の上に在
りと知るべし、古歌に

さかざらば櫻を人のをらましや
櫻の仇は櫻なりけり

The Deity.

I know, as my life grows older
And mine eyes have clearer sight,
That under each rank wrong somewhere
There lies the root of right;
That each sorrow has its purpose,
By the sorrowing oft unguessed;
That, as sure as the sun brings morning,
Whatever is, is best.

I know that each sinful action,
As sure as the night brings shade,
Is somewhere, some time punished,
Though the hour be long delayed.
I know that the soul is aided
Sometimes by the heart's unrest,
And to grow means oft to suffer;
But whatever is, is best.

I know that there are no errors
In the great eternal plan,
And that all things work together
For the final good of man.
And I know when my soul speeds onward
In its grand eternal quest
I shall say, as I look back earthward,
Whatever is, is best.

From An outline of Theosophy
By C. W. Leadbeater

時計の見方

飛鳥川あすと言ひては流しやる
つきひにかくる柵ぞなき

今は昔、浪華見物に出かけたる田舎人、蠟燭を土産にとて持歸り、村人に頒ちたるに、いと珍しかりければ、其の用途を知るものとてなく、甲論乙駁、遂に物識りの言ふがまゝに、何れも是を煮て食ひしとか

國民の泰西文明を見る、恰かも田舎者の都會見物の如く、見るまゝ聞くまゝ殆んど是が取捨にいとまなく、唯々隨喜の涙もて輸入せしかば、自ら輸入すべか

らざるもの輸入せられ、輸入すべきもの輸入せられず
茲に圖らずも似而非文明を現出し、混沌たる狀態にあ
るを見ずや

文明の輸入につきての申分、甚だ不尠、就中其の著しきものを、時計の見方とす、時計の時を報じ、兼ねて裝飾の用をもなすこと東西異ならず、唯泰西に於ては時計の見方は一あるのみ、即ち短針は時を指し、長針は分を指す、短針2を指せば二時にして、3を指せば三時なり、さるを何事にも繁文縟禮を尊ぶ我國には、時計の見方にも亦種々あり、就中都鄙を通じて

最も多く行はるゝを、割增割引の二法なりとす、宴會集合の時間は多く割增法により、少くとも二時間位は割增をなして案內す、而して招待を受くる者は、割引法により、各自思ひ思ひに時刻を測りて參會す、於是乎、東京には東京時間あり、大阪には大阪時間あり、地方には地方時間あり

時間の問題は今更に新しき問題にあらず、而して今更に新しき問題なり、ナポーレオン嘗て敗北せる墺地利軍を嗤つて曰く「五分時の價値を知らざるが故なり」と、又一夕、晩餐に招きたる諸將の遲刻せし時、

己れ一人にて食事を終へ、軈て入り來る彼等を見て「食事の時間は既に去りたり、直に職務に服せん」と、フランクリン亦誡めて

汝の時間は汝の生命ぞ

と、邦人の時間を見ること而く重からざるは、蓋し時計の輸入せらるゝと同時に、其の見方を輸入せざりし爲乎、かくの如きは、卽がて相互に自殺競爭をなすにあらずして何ぞや、古歌に

すぎぬれば今日も昔となりぬるを
知らでやひとのさしも惜まぬ

沙翁曰く

I wasted time, and now doth time waste me.

と

時間外の時間

をりをりに遊ぶいとまはある人の
暇なしとてふみ讀まぬ哉

加藤清正の論語、二宮尊德の大學、ナポーレオンの法典は、共に夙に人口に膾炙せるもの、セネカ曰く

「吾人恒に光陰の短促を歎ず、善く之を用ふれば則ち常に足りて餘あることを知らず、大率人多く光陰を無用の事に費し、或は過惡の事に費す、故に人生の長短は其の功程を以て揆るべく、日月を以て度る可らず」

と

季節により勤務時間を伸縮し、自何時至何時と規定して時間を守ること、銀行會社はもとより、店舗工場、さては官廳學校に至るまで然らざるはなく、此の時間中若し勤務に故障を生ぜんか、缺席、遲刻、早退、或は事故の屆をなさしむ、官民の是を見る甚だ不輕、同盟罷工、工場法案、時間の問題豈大ならずとせんや

然り而して是れ、六時間乃至十時間の問題にして、時間内の時間なり、時間内の時間は一日中四分の一乃至三分の一に過ぎず、三分の二乃至四分の三は、時間外の時間にして、多くの人の意を用ひざる時間なり、

更に小なる時間内の時間を而く重んじ、更に大なる時間外の時間を而く輕んずるは、抑〻何の意ぞや、以て人生の四分の一乃至三分の一に囚はれて、即がて三分の二乃至四分の三を空しくせんと欲するか

一日の勤務而已を以て我が能事終れりとなし、準備と英氣とを貯ふべき時間外の時間に、酒食其の他有害の娯樂に耽り、思想を惑亂し、元氣を消耗して得意とする徒に至りては、其の愚、寧ろ憐むべし。

時間外の時間に訪問すべきを、全く自己の都合により、時間内の時間に之をなして、勤務を妨げ、時間

時間外の時間に之をなして、内の時間に訪問すべきを、恬として恥ぢざるが如き人の修養と安息とを妨害し、金錢を以て購ふべからざる人の時間卽輩に至りては、正に盜人中の盜人と云ふべし

カーライルは

So here hath been dawning another blue day;
Think, wilt thou let it slip useless away?
Out of eternity this new day is born;
Into eternity at night will return.

と

夜の要

沙翁は

Sleep gentle sleep; how have I frighted thee?

と、半分は枕に分ける五十年、寢ることを無視して、人生の長短を撰るものあり、蓋し是れ盾の半面のみを見たるには非ざる乎、何となれば、夜は正に心身の建設時にして、世に一班に見らるゝよりは、更に更に大切なるものなればなり

家を建築するにも、我國にては應接室最も注意を

拂はるゝやうなれども、米國にては寢室に重きを置くものゝ如し、是れ卽がて睡眠の目的を充分ならしめんが爲ならん

睡眠には、寢室の位置、間取、換氣、裝飾、色彩、寢具は勿論、睡眠前の食事、運動、娛樂等まで、影響する所尠からざらん、而して特に甚しく安眠を妨ぐるものは杞憂乎

ナポーレオンは、部下に令して、陣中と雖も夜は自己の時間なりとて、一切の報告を聞かざりしと

乞ふ、日の暮るゝを見て噪ぐの愚を罷めよ、明日の麗かなる旭を樂みて、安らかに就け、靜けき眠りに

商業學と心理學

主として商家の子弟を集め、幼時より算盤の音に馴れし彼等の耳に、更に商事要項、商業算術、商品學、法制經濟、簿記など、主として權利義務、損益勘定の學科を入るゝ所を所謂商業學校とす

俚諺に、「味噌の味噌臭きは上味噌に非ず」と、經濟界に立たしむるの故を以て、對物教育のみにて事足れりと思惟する者あらば、そは大なる誤ならん、何となれば物を取扱ふ者は、物に非ずして人なればなり、商業家は、常に物を以て人を相手とする者なれば、物を

知ると同時に人をも知らざるべからず、俗に「理窟商人金儲せず」「商三年」など云へるは、蓋し此の間の消息を漏せるものには非ざる乎

人を知るには、北條早雲の力めて學びしと聞く、所謂人間學なるものを攻究するに如かじ、若し人間學難しとせば、人間の心的作用を研究する心理學を學ぶに如かざるべし

元龜三年十月、德川家康、三方ケ原の戰に、武田信玄に破られ、濱松城に遁れ歸り、衆寡敵せず、防戰必敗すべきを知るや、悠々門を開きて、篝火を焚き、武田勢の來るを待つ、寄手城門に迫り、其の備の意外なるに驚き、必ず深く謀る所あるべしと、逡巡ふ折しも、暮の太鼓、鼕々として城内に響きける、武田勢之に怖れ、内に得入らずして其の儘退軍せりと、家康の智略、克く膽を以て敵に當り、天晴、虎口を逃れ得たり

着眼の鋭、事務の才、元より商業家として必要ならんも、取引、折衝に於て能く其の相手を知らんが爲に、人卽ち Human nature を讀む力は、更に更に必要なりとせずや、顏付、素振、言語、歩行に至るまで、悉

く其の研究の資料たらざるはなからん、於是乎、余をして忌憚なくいはしむれば、商業學の過半は正に心理學なりといはん、而して我が國在來の商業學校に、心理學の設けなきは、果して一の缺陷には非ざる乎

資本と資本金

何々會社、何々商社、資本金若干と稱し、資本金を萬能視し、其の多寡によりて、忽ち事業の成敗を豫測するが如きは、果して正しき見解と云ひ得べき耶

試みに、所謂資本なるものを分類せん乎

經營者の人格
經營者の手腕
經營者の自信
資本金

の四となり、世の所謂資本金は單に其の一部に過ぎじ、

而して資本金は必ずしも經營者の人格、手腕、自信を造出する力を有せざらんも、經營者の人格、手腕、自信は克く資本金を作り得べき能力を有することを知らざるべからず

邦人は未だ這般の消息に通ぜざるが故か、往々資本金のみを聞きて、其の他の資本を度外視するの弊あり、或は之を利用して、人格、手腕、自信なき企業家にして、事業の爲に事業を興すに非ず、唯自己の爲に事業を興し、資本家を說き、相携へて恐るべき病菌を繁殖し、財界を惑亂する者甚だ尠しとせず

小大となく、我が國會社重役の顏觸を見よ、家族、親戚、同鄕の緣故を以て、其の職に就かしむる結果、當該事業に無能なるものゝ何すれそ夫れ多き、如斯にして、眞正の事業を翫弄しつゝ、尙事業の發展せざるを云爲する者あり、云爲するもの是耶、發展せざる事業非耶

資本と事業とは相互に相愛するものにして、事業の成敗は經營者にあり、而して經營者を左右するものは經營者の Will (意志) なり、善も惡も皆これ經營者のウヰルより出づ、而して常に其の事業の羅針盤たる

ものは經營者の自信乎

多くの場合に於て、事業を破壞し、國民の猜疑心を強むる罪、經營者に存せざるはなからん、若し夫れ事業をして人格と手腕と自信とを基礎として出發せしめんか、如何なる事情、如何なる妨害も、容易に之を失敗の淵に沈むること能はざらん、世の資本家たる者、注げ意を所謂資本金に、而して同時に必ず資本に

樂屋より見たるウオールスヅリイト

世、倫敦金融市場を稱して、倫敦金融市場とは呼ばずして、寧ろ單に、ロンバート　スヅリイトといふ、蓋し、倫敦金融市場の中心が、ロンバート　スヅリイトに存するが故ならん

ウオール　スヅリイトは、紐育金融市場の樞區にして、紐育株式取引所の代名詞として、世界の普通用語となれること、「北濱」「兜町」の我が國に於けるが如し、而して投機取引の盛なる、世界中恐らくは、ウオール　スヅリイトの右に出づる所なからん

世には其の一面を見て、直に投機は賭博なりと難ずるものあり、其の半面を聞きて、直に投機は賭博に非ずと駁するものあり、中には專ら自己の利害より推して說を立つるあり、唯法律は投機を許して賭博を許さず、隨つて少くとも法律の、投機と賭博とを同一視せざる事のみは自ら明かなり、而して尙投機を難ずるものあるは、正に投機の本能と實際との懸隔の、あまりに大なるものあるが故ならん、兎まれ、投機がその理想より遠ざかりたるは事實にして、殆んど議論の餘地を存せじ、蓋し是れ卽がて Chance (僥倖) を望む人情の然らしむる所乎

投機の利害如何は少時措き、嘗て仲買として二年有半、紐育株式市場裡に在りしまゝ、表面より觀る人の爲にもと、樂屋より見たる所を爰に一二述べん

「北濱」「兜町」に在る取引所は、株式會社組織なれども、ウオール スヅリイトの紐育株式取引所は、千百名の會員より成る、一の倶樂部に過ぎず、「北濱」「兜町」は嚴重なる法律之を制裁し、且つ重稅を負擔するも、ウオール スヅリイトは、之を前者に比較せば、或は殆んど法律の干涉を受くることなく、課稅を納付

することなしとも謂ひ得ん

「北濱」「兜町」は規模至つて小なれども、ウオールスヅリイトは規模極めて大なり、前者は微々として島國的なれども、後者は堂々として世界的なり、而かも其の組織の繁簡、全く之と相反比せるは、またやがて簡單を尚ぶ米國風と、複雜を喜ぶ我が邦風との相異する所乎

ウオール スヅリイトの舞臺全部を操るものを、俗に Big Interest といふ、ロックフェラー、モーガン、ハリマン、ヴァンダビルト、カーネイギ、シユアップの如き、財界を自己の意の儘に左右し得る實力を有する人々を指す

觀客は、或は經濟界の事情、農作物の豐凶、金融の緩迫、何々會社の盛衰など、所謂景氣不景氣、天候、國際關係など、專ら舞臺を左右する動機なりと見んも、舞臺が多くの場合に於て、其の正反對に動くと云ひ得る程の現象を呈するは、即がてこれ等の「ビッグ インテレスト」が意の如く之を操縱するが故なり

舞臺に蝟集する投機者は、所謂素人にして、彼等は財産のあらん限り、尚融通の出來得る限りを盡して

來る者にして、之を俗に Lamb（小羊）と稱す、その來るや、一群又一群、恰かも潮の寄するが如く、各先驅者によりて導かる、先驅者に二派あり、一は常に市場を樂觀する强氣派にして、之を俗に Bull（牡牛）と稱し、他は市場を悲觀する弱氣派にして、之を俗に Bear（熊）と呼び、舞臺は轟て是等二派の輸贏場と化す

劍戟閃き、砲彈飛び、叱咤咆哮、奮擊殺到、正に修羅の巷となる、やがて戰ひ疲れて、「ブル」「ベアー」兩派の「ラム」は悉く、其所に旋轉する投機市場てふ

大車輪に懸かり、赤き鮮血は絞られ、青き死屍となりて出づ、爲さぬは爲すに勝るの諺もあり、飛んで火に入る夏の蟲の誡もあれど、仲買人にして尙、この車輪に投じて、悲慘の最後を遂ぐる者また甚だ尠しとせず

車輪を廻すものは、卽ち「ビッグ インテレスト」なり、觀客は表面より之を見て、「ビッグ インテレスト」も「ラム」も等しく投機をなすものなりと想はんも、樂屋より之を見れば、必ずしも全く當れりとせざるを知る、「ビッグ インテレスト」は自己に殆んど危險なし、何となれば車輪を廻轉するは彼等自身なれば

なり、されば彼等は世の所謂投機をなす者に非ずして、寧ろ、法律の許す最も安全なる方法により、人情の弱點を遺憾なく利用して、「ラム」の懷を集むる者なりとやいはん

一攫千金てふ眼鏡は、白きものをも白くは見せじ、而して一度この眼鏡を用ひんか、かの恐ろしき大車輪も、極めて懷しく見え、如何なる人の如何なる忠告も、之を顧みるに遑なく、直に之に接近し、往々身をその旋轉中に投ずるに至らん

若し夫れ、「ウオール スヅリイト」を樂屋より見たる余をして、爰に樂屋以外の觀客に、將た舞臺の「ラム」に呈するに、相場必勝の方法を以てせしめんか、余は一言にして敢て之をなさん、何ぞや

Keep hands off (手を染むるな)

即ち是なり、これ正に余が樂屋に於て發見したる、相場必勝の唯一の祕訣なり

犬と雕(くまたか)

或日一匹の犬、各所を漁りて一片の肉を獲たり、口に銜へて家路を急ぐ途すがら、とある小川の橋上に出で、ふと水面を臨きける、獣の身のあさましさ、己が影の寫れるとも知らで、肉の影を見ては、矢も盾もたまらざりけん、いざ我物となし呉れんと、一聲高く吠えける刹那、肉は口より離れて水に落ち、遂に己が肉をも失ひけり

巷談奇叢に

鶴鶏謂雛曰、昨我食猪而美、女亦常有食乎、

雛曰、汝如何獲之、鵠鶏曰、我鑽猪耳而入腹、
攫心啄腸、頃刻殪之、亦已容易耳、雛聞之、
自憤曰、汝眇焉小鳥、尚能殪猪、我而不能焉、
無乃輕侮於衆禽乎、我不可徒以已也、乃與鵠
鶏翔于谷中、適見二猪並臥岩下曰、女所獲僅
一耳、我乃一舉兩得、使汝買餘勇也、遂鼓翼
而下、直雙攫二猪、猪忽驚起、相背奮走、雛
持之不放、力不勝、終胯間分裂而死矣

と、他人の花の赤く見ゆる人よ、慾に魅らるゝ者よ、
卿等は、胯をさきし雛、肉を失ひし犬の轍を覆まんと

欲するか、天の人を作るや、元より必ず各々に與ふる
に其の分を以てす、何んぞ己が與へられたる所を捨て
て、人に與へられたる所を望む要あらんや、イソップ
物語の中に

Do not covet other people's possession, but be content
with your own.

生存競爭

四北
女女
人人
鬼鬼

賤の男が小田かへすとて待つ雨を

大宮人は花にいとはん

誓文拂と見切品

戸々に、屋號商標を染め抜きたる旗に提灯、無數に吊し、吳服太物、小間物、履物、其の他日用商品、店頭狹しと陳列し、丁稚番頭手代さては臨時雇人、思ひ思ひの扮裝、曳々聲して客を呼ぶ、街路は群衆犇々と詰めかけ、囂々として人の流を作す、寄り來る老幼男女、各〻若干の金錢を懷中にして、日來望みし品物安く購ひ吳れんものをと、恰かも餓鬼の食に共ふが如く、鵜の目鷹の目、かき分け押し分け進み寄す、是れ關西地方の都邑にて行はる〻年中行事の一なる誓文拂

の光景なりとす

蓋し物價調節の理に疎き人々の、相當の代價を支拂はずして、相當以上の物品を獲んとする、人情の弱點を利用して、見切品を廉價にて賣出すべしと吹聽し、人氣を集むる一種の販賣法乎、慾に目のなき貴賤貧富、魚の如く餌に釣らるゝにや、將た麵麭を求めんと欲して石を握り、魚を得んと欲して蛇を捉まんとするにや

同じ筆法もて、此の世を渡らんとする人、誓文拂の光景の一面を見て、其の半面に及ぶ時、果して如何の感かある

或物と何物

Something and Anything

怜悧しく見ゆる男の、出逢頭に「何か面白いことはないか」と言ひ掛くるを耳にすることあらん、蓋し彼等は或物を得んと欲して、常に齷齪せるものならん、さりとて世にしかく下品なるもの亦あらんや

或物を得んと欲せば、宜しく或物に對する何物かを提供すべし、こは一品を得んとて代價を支拂ふに異らず、凡そ世に代價を支拂はずして、得らるゝ商品何處にかある

何物をも提供せずして或物を望むは、譬へば砂を

絞りて油を求め、山を漁つて蛤を拾ふが如く難からんに、かかる横着なる所望を抱ける者よ、卿等は今尙「哲學者の石」を擁せんとするにや

會社商店に職を求むるもの、平身低頭「何か仕事はなきや」と、是れ卽がて、神が與へたる、使命を無視し、淺間敷も之を人に尋ぬるものにして、痴者の、己が行先を人に聞くと、選ぶ所孰れぞ

世の青年よ來れ、自信と能力とを携へて來れ、來りて叩け、忌憚なく叩け、己が欲する所の門を眞の成功は僥倖にあらじ、何れも不斷犧牲の支拂はれたる結果ならざるはなからん、位置を求めんと欲する者、報酬を得んと力むるもの、其の與へられざるを恨むの愚を止めよ、止めて自覺せよ、己れの腑甲斐なさを、而して努力せよ、飽迄も

尊德の訓に

夫れ空腹なる者他に行きて「一飯を賜へ余庭を掃かん」と云ふとも決して一飯を振舞ふものあるべからず、空腹をこらへてまづ庭を掃かば或は一飯にありつくことあるべし

と

紹介と照會

乙が丙に面會を求めんと欲する時、乙を知り、丙を知る甲が、媒となりて、乙を丙に引合はすことを紹介と云ふ

甲が乙を丙に紹介せんと欲せば、乙丙雙方の爲人を知り、同時に乙の要談の內容をも解し、且つ紹介によりて、乙丙兩者を共に益するならんとの、自信を得たる時に於てのみ之をなすべし、紹介する人の責やまた輕しとせんや

BがCのことを、Cに聞合すを直接照會とせば、

BがCのことを、Cを知るAに聞合すことは間接照會乎、己れを知る己れに如かず、彼を知る、彼に如かず、若し直接照會をなし能はざらん乎、始めて間接照會の要生ぜん

B若しCのことを、間接に照會せんと欲せば、何人よりも能くCを知る、Aを求むることを要し、照會を受けたるAは、私情を挾まず、世評に捉はれず、唯事實を根據としたる、調査に基きて回答すべき而已、若し輕忽の念を以て、之を爲さん乎、己を欺き他を誤ること、蓋し計り知る可からざるものあらん

心せよ、世の照會者と紹介者

論説

借金と保険

沙翁戒めて

借る人となる勿れ、貸す人となる勿れ

と、蓋し金錢の貸借は夫れ恨みの種蒔乎、試みに借主の側より之を見ん、古諺に「山に入りて虎を捕ふるは易く、口を開きて金を借るは難し」と、希臘の諺に

「借金は自由の民をして奴隷たらしむ」伊太利の語にも

「病人は眠ることを得れども、借主は眠ることを得ず」

と蓋し金を借るは憂を借るに等しとの謂乎

飜て貸主の側より之を見ん、金錢には一種の Com-